

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-11C	A-33C	16-135
滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門		
題名（原題／訳）		
Alcohol Consumption and Multiple Dysplastic Lesions Increase Risk of Squamous Cell Carcinoma in the Esophagus, Head, and Neck. 飲酒量と多発性異形成不染帯は食道、頭頸部での扁平上皮ガンのリスクを上げる		
執筆者		
Katada C, Yokoyama T, Yano T, Kaneko K, Oda I, Shimizu Y, Doyama H et al.		
掲載誌		
Gastroenterology. 2016 Nov;151(5):860-869.e7. doi: 10.1053/j.gastro.2016.07.040. Epub 2016 Aug 1		
キーワード		PMID
扁平上皮ガン、食道ガン、頭頸部ガン、禁酒		27492616
要 旨		
<p>目的： 上気道・上部消化管の多発性扁平上皮がんを発生する患者がいるが、飲酒はこの領域のガン化の過程に関連している。著者たちは、飲酒や喫煙と、食道や頭頸部の扁平上皮ガン発症に伴う異形性扁平上皮との関連を明らかにした。</p> <p>方法： 早期の食道扁平上皮ガン 331 人の患者を対象に、ルゴール色素内視鏡を用いて食道の異形扁平上皮を調べた。ルゴール不染帯の数に基づいて 3 グループに分け、A グループは、不染帯なし、B グループは、1 から 9 個の不染帯、C グループは、10 個以上の不染帯あるものとした。飲酒歴、喫煙歴、食事歴を含む生活習慣を調査した。登録前に咽頭喉頭鏡検査を受け、頭頸部ガンを合併していない食道扁平上皮ガンだけを対象者とし、上皮内に限局した扁平上皮ガンは除外した。調査時に食道と頭頸部に非染色帯が発見された場合は、異時性の可能性を考慮に入れた。研究のエンドポイントは、食道扁平上皮ガン内視鏡的切除後の食道、頭頸部の異時性扁平上皮がんの累積発生率とする。扁平上皮がんの診断はルゴール不染帯の等級に従った。登録時に禁酒、禁煙指導を行った。</p> <p>結果： 2 年以上の研究期間に、食道の異時性扁平上皮ガンは、グループ A で 4%、B で 9.4%、C で 24.7%、頭頸部扁平上皮ガンは、グループ A で 0%、B で 1.7%、C で 8.6% 確認した。食道または頭頸部扁平上皮ガンは、グループ A で 4.0%、B で 10.0%、C で 31.4% 確認した。禁酒の食道多発性扁平上皮ガンのリスクは統計的に有意に低下した（ハザード比 0.47、95% 信頼区間 0.25-0.91、p 値 0.025）。一方、禁煙はリスク低下を認めなかった。</p> <p>結論： 食道の多発性異形成の不染帯数が多いほど、多発性扁平上皮ガンのリスクが上昇した。また、禁酒は異時性の扁平上皮がんのリスクを低下させることが明かとなった。</p>		